

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2023年 6月 29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 京都大学医学研究科

職名・学年 博士2年

氏 名 勝島 倫子

助成の種類	令和5年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	第33回国際助産学会			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待・ <input type="checkbox"/> 口頭・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Glucose variability during labour and birth in pregnant women with normal glucose tolerance: Case series			
開催場所	インドネシア バリ ヌサドゥア バリヌサドゥアコンベンションセンター			
渡航期間	2023年 6月 10日 ~ 2023年 6月 16日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円		
	使用した助成金額	150,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した経費全体をご記入ください)	費 目	金 額 (円)	
		航空運賃	142,600	
		宿泊費	123,576	
		滞在費	25,439	
学会参加費		96,376		
その他	15,230			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は助成していただきありがとうございました。はじめて国際会議で発表することができ、今後の研究生活にとって貴重な経験と学びを得ることができました。			

成果の概要

京都大学医学研究科 博士2年

勝島倫子

1. 学会の概要

学会名：33rd ICM Triennial Congress（第33回国際助産学会）

開催場所：インドネシア、バリ、ヌサドゥア、バリヌサドゥアコンベンションセンター

開催期間：2023年6月10日～15日

開催機関であるICM（国際助産師連盟）は、WHO（世界保健機関）と協働して活動を行っている。本学会は、助産師をはじめとする周産期分野の関係者約4000人が知識や技術について情報交換することにより母子へのケアを国際的に向上させることを目的としている。実際に世界各国の助産師が活発に交流することができ、母子へのケアについてさまざまな講演・議論がなされた。

2. 研究発表の概要

発表題目：

（英文）Glucose variability during labour and birth in pregnant women with normal glucose tolerance: Case series

（和文）正常耐糖能妊婦の分娩時の血糖変動：ケースシリーズ研究

分娩時高血糖により新生児低血糖のリスクが高くなるため、分娩時の血糖管理の重要性が示唆されている。しかし、各ガイドラインで推奨されている血糖目標範囲は統一されていない。原因として、耐糖能異常妊婦を対象としたことによる妊娠期の高血糖の影響や、血糖測定機器の不足により連続的に血糖を測定できなかったことが考えられる。近年では、持続血糖モニター（Continuous Glucose Monitoring, CGM）が開発され、血糖を連続して測定することが可能となってきた。そこで本研究は、正常耐糖能妊婦を対象にCGMを用いて、分娩時の血糖変動を明らかにすることを目的とした。得られた6名のCGMデータより、全対象者で児娩出直前から児娩出にかけて血糖値は上昇し、児娩出時に最大となり、その後は低下、1～4時間後に再び上昇するという統一した変動が認められた。血糖の時間分布は、各ガイドラインで分娩時高血糖とされる100 mg/dL以上：10%、120 mg/dL以上：5%であったが、新生児低血糖などの異常は認められなかった。以上より、正常耐糖能妊婦でも分娩時血糖目標範囲を超えることがあると分かった。より妥当性・信頼性の高い血糖管理目標を確立し、安全かつ厳格な管理を行うためにも、さらなる症例を積み重ねる必要がある。

本研究のポスター発表に、世界各国の参加者が興味を示された。分娩中の管理に関して、さまざまな意見を交換することができ、今後の研究活動のためにもとても有意義な発表となった。

3. 謝辞

本学会がはじめての国際学会での発表であった。発表準備から発表までの過程を通して、論理立てて思考する能力や国際的に議論する能力を養うことができた。また参加を通して、世界各国でどのような研究やケアを行っているのか学ぶことができ、参加者と繋がることができた。学会参加を通して得られた能力や知識により、今後も新たな視点をもって研究を進めたい。

最後に、助成をいただいた京都大学教育研究振興財団に心より感謝を申し上げます。